



2



5



3



4

- 1.取材はイルサルトにて。約2時間が一瞬で過ぎていきました
- 2.撮影当日に仕立てあがった船橋さんのスーツ
- 3.独自に開発したカード型コーチング教材 TOILAB
- 4.ベストセラーシリーズ“英会話は筋トレ”
- 5.足元はスニーカーを合わせ軽やかに

母親という 舞台を中心に 家族がまわっている

でもあっても組織であってもこの根本は何もかわりません。夢は人から引つ張られては叶うものではありません、他人からの刺激で走れるのは一時的です、目標達成にむけ全力で走り続けるためには、自分がやりたいんだ。その理由は「だからだ」という内なる動機付けを整える必要があるのです。その状態づくりに関わるのがコーチの使命といえます。

出身は神奈川県海老名市、金型の会社を経営する父と元タカラジェンヌの母、妹。4人の家族で育ちました。母は宝塚歌劇団に16歳で入団、18歳でデビューして娘役のトップまでのぼりつめました。しかし10年でスパッと引退し父と結婚して海老名に移り住みバレエスタジオを始めました。元タカラジェンヌですから美人ですしオーラもハンパない。乗っていたクルマも真っ赤で海老名の街ではすぐ目立つのです（笑）。華やかな母は授業参観に来てもすぐ目立つ：でもそれにくらべ自分は地味。母親という舞台を中心に家族がまわっている感じがしてなんとも言えない居心地の悪さを常に感じていました。でもそんな母がいつも言っていたのは「わたしは宝塚音楽学校にいくために中学しかでないからユキちゃんは大学まで行つてね」。母の存在感と実際にコトバでかけられるメッセージが相反しすぎている。そして父も親戚もみんな自営業ばかりで普通に勤めている人が1人もいない：そんな環境で「自分はいたいどう生きていけばいいんだ：」と将来に対する漠然とした不安ばかりふくらんでいきました。

進学先は立教大学経済学部。成績と内申点で行ける範囲を消去法で選んだだけで積極的な選択ではまるでありませんでした。将来を楽しくそうに語る同級生の輪に入りきれない：そこに残っていたのは家族のつながりから遠くなったような孤独感と、進路を自分で決めていないモヤモヤ。大学を卒業する22歳までのあいだは私にとっては「暗黒期」そのもの。なぜなら意思がなにもなく主体的な選択をまったくしていなかったから。ちなみに高校時代の英語の偏差値は40台。英語はまるで得意科目ではありませんでした。そして大学卒業するときに「これ以上、後悔を重ねたくない」とはじめて初めて自分の意思で選んだのが文学座の研究生。小さい頃からバレエの発表会などで舞台上に立つことがあったことや母のDNAもあったのでしよう、自分のルーツに近いことを1度はやってみたいと思いついて受検してみました。運よく600人の応募のうち60人に選ばれました。1年間のお稽古のあと60人がさらに6人に絞られたのですが、ここでは選ばれることはなく芝居の道はたった1年で途方に暮れました。もちろん落胆はありましたが「私の生きる場所はここじゃない」となにか納得する自分がありました。それから少ししてアナウンサー事務所の試験に合格しました。しかし事務所に入っただけではお仕事はなく、番組のオーディションに合格して初めてお仕事がいただけるのですが90%以上が不合格。なかなか仕事に繋がらずアルバイトの掛け持ち生活。や

はりアナウンサーというのは花形なのでライバルも多く甘い世界ではない。そこで自分の専門性を磨こうと小さな事務所に移籍し、専門領域を「展示会、企業プレゼン、ゲームショーのMC」といったビジネス専門にしたところ合格率が90%を超えるようになりました。原稿の丸暗記は得意でしたが、それでは心に届かない。どうすれば自分ごととして伝えられるかを考え続けナレーションに工夫しているとそれがすごく好評でそのとき初めて「みずから考えたこととで人の役に立つ喜び」を感じることができたのです。

本当に願う 目的があれば、 人は勝手に動きだす

展示会で外資系企業のブースでお仕事する機会も増え、英語が身近になったことで「少しでも現場で英語が使えたら」と英語スクールに入ったのですが、結果それがその後の私の人生を大きくかえました。英語を学びたいと入学したのに「あなたは何のために勉強するの？」「あなたにとってコミュニケーションの目的は？」と禅問答のように問われ続けるのです。英語能力を伸ばしたいから来たんだ！と最初は思っていたのですが、何度も何度も問われつづけると何故なんだろう：と考えはじめます。と同時に今までの自分の人生ってなにか薄っぺらくて、どれだけ周りの人に依存して生きてきたのだろうと気づきました。同時に自分らしい生き方をするために全力で日々をすごそう！と決める